HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	沖縄と北海道の言語生活(共通語化と方言) : 沖縄と北海道の比較研究に向けて(<特集>共同研究報告 : 近代日本における文化・文明のイメージ)
著者	菅, 泰雄
引用	北海学園大学人文論集, 6: 127-151
発行日	1996-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

沖縄と北海道の言語生活（共通語化と方言）
── 沖縄と北海道の比較研究に向けて ──

菅　　泰雄

1．はじめに

近代日本の国家づくりは，中央集権体制をめざし，政治的・社会的に全国的な統一をはかることが必要とされた。その際，大きな問題となったのは，国語の確立であった。江戸時代を通じて進行した方言の分化を統一する必要にせまられたのである。

本稿の目的は，日本の両端に位置する北海道と沖縄における共通語化の過程を，先学の研究成果をもとに，その問題点と特質を言語生活という面から比較し考察を進めるための第一歩として，まとめることにある。

北海道の人間にとって，遠く離れた沖縄の歴史・文化・言語は学校教育の問題もあり，残念ながらなじみの薄いものである。試みに，授業で『日本語音声』（注１）の「音声データベース　桃太郎･天気予報」から，首里方言と今帰仁方言による桃太郎を聞かせて，その感想を学生に求めたところ，「中国語のようだ」「韓国語のようだ」，「ところどころ固有名詞の一部が聞き取れたが，その他の部分はまったく分からなかった」，「ところどころ分かることばがあるので不思議だ」などの声があった。いわゆる標準語と大きな隔たりを持つ沖縄の方言は，自分たちは「標準語」を話しているという意識の強い道産子にとって，一つのカルチャーショックであったようだ。

確かに，別な言語，外国語として琉球語を捉えることは，ヨーロッパにおける諸言語の捉え方からいえば，できないことではない。しかし，琉球語と日本語は言語学的には同系統であり，同じ日本語の方言と認められて

いる。北海道方言と縁が深い東北方言であっても，そのネイティブ同士の話は理解できないし，鹿児島の方言もまた同様に外国語のようであるのだが,沖縄の言葉は特にその隔たりを大きく感じるのが正直なところである。

沖縄では今でもみんながこのようないわゆる伝統方言を話していると誤解する学生も出てくるので，注意しなければならないが，一方で，現在，沖縄では方言によるラジオニュースをはじめとする番組がいろいろと放送されている事実を示し，今回の沖縄調査の際収録した番組の一部を聞かせたところ，学生の声に「沖縄出身の若い歌手やタレントの話す標準語からは，このような方言の影は全く感じられない。彼らが標準語を習得するには大きな苦労があったことだろうことを思うと，改めて彼らを見直した。」というのがあった。ここには，先に述べたような誤解も含まれているのであるが，沖縄の共通語化の歴史というふうに読み替えると，この指摘もあながち間違いとは言えまい。

一方でまた，系統的に全く別なアイヌ語を捨て，日本語に乗り換えざるを得なかったアイヌ人の歴史がこの北海道にあったことも忘れることはできない。そしてその過程には共通した点が多く見られるのである。

この点を踏まえた上で，まず，沖縄における共通語化の過程と北海道方言における共通語化の過程そして言語生活の状況を振り返ってみることにしたい。

2．共通語化と方言，これまでの研究とその流れ

2－1　北海道における共通語化の研究

昭和33年から3年間にわたり，北海道では「共通語化」の調査･研究がなされた。科学研究費(総合研究)「北海道の言語の実態と共通語化の実態(代表者：岩淵悦太郎)」がそれであり，当時東京語に近いといわれていた「北海道共通語」がどのように成立しつつあるのかが，国立国語研究所(1965)「共通語化の過程 ── 北海道における親子三代のことば ──」で報告された。これは,「大部分が明治以降開拓されたところであるし，入植の歴

史も今なら明らかにしうる」ということで，全国各地から移住者を受け入れたという，北海道の特殊性を踏まえた「共通語化」の研究である。北海道入植者を対象に世代差を調査し，その結果，語彙は一・二世間で，文法や音韻は二・三世間で，共通語化の程度に落差があることが明らかにされた。

この調査・研究からほぼ一世代，30年を経た，昭和61年度～昭和63年度にかけて，科学研究費(総合研究(A))「北海道における共通語化および言語生活の実態（代表者：江川清)」が，実施された。これは，約30年間の共通語化の展開状況と現在の言語生活の実態を調査したものである。

1）富良野市における比較継続調査

2）北海道各地の高校生に対する比較継続調査

3）富良野市における農村型地域社会の言語生活，共通語化調査

4）札幌市における都市型地域社会の言語生活，共通語化調査

5）札幌市在住単身赴任者に対する言語生活調査

などのテーマで実施された。この最終的な報告書は現在のところまだ公刊されていないが，部分的には，「報告講演会」(富良野市文化会館・1987)や，平成2年度国立国語研究所研究発表会『北海道における共通語化』(1991)および，国立国語研究所『研究報告集』等に発表されている。他に，後述するように小野（1993）などでは，共通語化の実態，方言意識の特異性についての研究が見られる。

2－2　沖縄における共通語化の研究

沖縄の共通語化については，外間守善(1977)「沖縄の言語とその歴史」，外間守善（1981)「沖縄における言語教育の歴史」，本永守靖「南島方言と国語教育」(1984)，永田高志・他（1985)「沖縄県大里における共通語化」，屋比久浩（1987)「ウチナーヤマトゥグチとヤマトゥウチナーグチ」，中本正智(1990)「国語教育と方言教育」，永田高志(1991)「沖縄に生まれた共通語（文法論)」，町博光（1992)「沖縄方言の現在」，永田高志（1993)「沖縄に生まれた共通語（音韻・アクセント篇)」，中松竹雄（1994)「沖縄県に

おける共通語化の過程」などの研究がある。これらは共通語化の記述的研究や言語接触，国語（言語）教育，言語生活などの観点から共通語化について考察したものである。

2－3　沖縄の共通語化

この節では，これらの成果を外間守善（1981）「沖縄の言語とその歴史」を中心に紹介し，筆者なりの整理をし，今回の調査旅行で収集した資料から関連した記述を加えていくことにする。以下の時代区分は外間による。

琉球王国が1429年に成立してから，約450年後の明治12年に琉球藩が沖縄県となった。それまでは，首里語がいわば標準語であったわけだが，この上にヤマト言葉がのっかるという，言語生活の上で大きな変化が起きることになる。翌明治13年には，「会話伝習所」が設立され，中央語を「読み書き」できる教員を養成した。その対象になったのは読み書きの素養のある士族であったことは，琉球王国の文化伝統を活かした方策であったと言えよう。琉球王国時代からすでに中国語や，英語，そしてヤマト言葉の言語習得の歴史があったこと，また，教育制度の整備がなされていたなど，その素地が十分にあったのである。そこで，使われる会話教科書として『沖縄対話』（上，下）が沖縄県学務課によって編纂された。

2－3－1　「東京の言葉」時代（明治12年から30年ころ）

『沖縄対話』によって，公的な共通語教育がはじまることになるのだが，そのキーワードが「東京ノ言葉」であった。これは，

○東京ノ　言葉ハ　広ク　通ジマスカ

●トウキャウヌ　クトバー　ヒルク　ツウジーガシャビーラ

○何県ニテモ　大概　通ジマス

●マーヌチンヤテン　テーゲーヤ　ツウジヤビーン

とあるように，「東京ノ言葉」をモデルとして，習得に励んだのである。幕末期に見られた欧米人の日本語会話書と同様の，対訳会話教科書である。

一般の人々にとっては，まさに外国語を学ぶに近い努力と苦労があった

ことが考えられる。

2－3－2 「普通語」時代（明治30年から昭和10年ころ）

明治29年には『沖縄語典』が編纂されている。ここでは，「首里語」と「普通語」という用語が使われていることが注目される。中央では定着しなかった，方言に対立する概念を表す「普通語」という用語の使用は，外間守善（1971）『沖縄の言語史』によると，千葉，佐賀，青森，石川，静岡，高知，山形などで明治30年代から45年までの時期に見られるという。いずれも，方言色の強い地域であり，当時，近代化を進めていくために，これらの地方が置かれていた状況を反映したものになっている。

沖縄では，最初自発的かつ積極的な標準語志向の取り組みが見られたようであるが，明治40年頃から，「普通語励行運動」が学校教育において「方言札」という形で推進されることになってくる。

これは，全国に通じる標準語を奨励し，義務教育を成功させ，富国強兵という国策に沿うための，近代化を押し進める社会的要請であったといえる。この「方言札」に象徴される標準語教育は，柴田武（1978）『社会言語学の課題』で

> 標準語教育は，東京と地方(イナカ)，ことに東京と東北とのあいだに大きな隔たりをつくったことになる。標準語教育は，藩に分割された領民を平等に国民として統一する，言語統一の理想から出たものだったのに，皮肉なことには，標準語教育が新しい地方分割をもたらすことになった。……方言札は方言を封じこめることには成功した。しかし，それは，方言を口にしないようにさせただけではなく，ものをいわないようにもさせた。

と述べているように，「方言コンプレックス」をはじめ大きな問題を残す結果となってしまった。

しかし，沖縄では大正末期から昭和期にかけて，海外移民にともなう新しい問題も発生した。比嘉正範（1983）「海外の琉球語」に，

> 社会言語学的には，沖縄出身者の特異性は，言語的に二重の悩みを経

験したということである。一つは，移住先の国のことばの習得が難しく，言語的に満足できる市民生活や知的生活ができないという移住者全員に共通の悩みであった。・……もう一つは，沖縄からの移住者は受け入れ国で，外国語の生活に適応しなければならないのと同時に，日本人移住者のいわゆる日系人社会で日本語の生活にも適応しなければならない悩みであった。外国に移住して，日本語のことで苦痛や屈辱を味わされることになろうとは，沖縄出身者にとって思いもよらぬことであり，皮肉なことであった。

とあるように，沖縄の人の置かれた特異な事情から，自ら進んで積極的に標準語習得に努めた，あるいは，そうせざるを得なかったことも見落とすわけにはいかない。

2－3－3　「標準語」時代（昭和10年から30年ころ）

昭和5年に桑江良行『標準語対照沖縄語の研究』が出版され，それまでの「普通語」にかわって「標準語」という用語が使われることになった。これは,「沖縄県の学生が特に誤り易い語句及び音韻に就いて」にはじまり,「同語異義弁」「沖縄語の語原について」「標準語及び沖縄語間で適訳を見出すに困難を感ずるもの」「標準語及び沖縄語間で互いに適当な直訳がないと思われる語句」と「附篇・沖縄語から見た古典」から，なっている。

ここでは，そのうち「直用又は直訳」による誤りについてからいくつかを具体的に見てみよう。

(1)　沖縄語を直用又は直訳する事から来る誤

○あて（心算）にしていた。と云うべきを，ツモッテイタ。と云うのは誤である。「君は出席するだろうとツモッテいたよ」

○はなせ（放）を，ユルセ。「つかまえている袖をはなせ」と云うべきを,「つかまえている袖をユルセ」。(注) 沖縄誤「ユルセー」の直用。

○鉛筆をけずる（削）を，エンピツヲトグ。(注)「エンピツィ　トゥジュン」の直訳。

(2)　用語・語格が妥当でないと思われるもの。

○いく（行く）を，クル。「あす君のうちに遊びにいくよ」と云うべきを，「あす君のイエに遊びにクルよ」

(3) 助詞使用上の誤

○「で」又は文語の「にて」を使用する所を，「カラ」。「俥で来た」「汽車で来た」「自転車で来た」「白雲丸で来た」などを，「俥カラ来た」「汽車カラ来た」「自転車カラ来た」「白雲丸カラ来た」。

(4) 副詞（主に有様を形容する語）の用法が妥当でないと思われるもの

○さっさと（早々）帰ってしまった。を，スラリト帰ッテシマッタ。

○でっぷりとふとった子供。をブタブタとフトッタ子供。

(5) 員数称呼の誤

○すずり（硯）いちめん（一面）を，スズリヒトツ。

○さら（皿）いちまい（一枚）いっこう（一口）を，サラヒトツ。

(6) 清音を濁音にいう誤

○やかましい（喧）を，ヤガマシイ。

○かに（蟹）を，ガニ。（注）こがに（小蟹）又は，いしがに（石蟹）の様に連濁の時にはにごって読む。

(7) 濁音を清音にいう誤

○でぐち（出口）を，デクチ。

(8) 短音を長音にいう誤

○き（木）を，キー。

(9)拗音を直音にいう誤

○しょもつ（書物）を，ソモツ。

(10) 直音を促音にいう誤

○はちくゎ（八課）を，ハックヮ

(11) 促音を直音にいう誤

○おっこちる（落）を，オツコチル。

(12) 転呼音を文字通りにいう誤

○ふじはらし（藤原氏）を，フヂハラシ。

このように，12の項目に分けて，誤用実例を説明している。そこまで，し

なくてもいいのではないか，これではまるで沖縄出身者であることをさとられないようにするための細かな手引きのように思われるほどであるが，そこにあげられている用例は興味深いものである。著者の桑江氏は，

我が沖縄県に於ける標準語使用励行の実際を見ると，実に前途遼遠の状態であるのみならず，上述の如く不純誤謬極りなき訛語及び誤用誤句を以て満たされた余り多くの実例を見出す事は誠に寒心に堪えないのである。吾々は是れこそ県民一致協力してと云いたいが，それはとても望まれないことであるから責めて県教育に従事している吾々だけでも平常注意懈らず一致協力して上述の如き不純の訛語を去り，誤用誤句を取り除き，純粋で気品の高き標準語を取入れ，県民一般に其の励行をせまり，以て国家の進運に副う様に力むべきであると愚考するのである。

と述べている(注2)。そこには，当時の国語教育関係者が近代化を目指して，必死になって標準語を普及させようと頑張っている様子がうかがえる。

昭和15年には，標準語励行運動が県治方針の一つとなり，「戦時下に於ける県民生活の刷新向上に関する具体的方策」という県の布令も出された。このような県の方針に対して，沖縄文化の研究にやってきた日本民芸協会が批判したことによって，方言論争がまき起こったのである。「近代化」と「文化」の対立である。このような問題は，沖縄のみならず，程度の差はあれ全国的な問題でもあったことと思われる。

中松竹雄（1994）によると，太平洋戦争時には沖縄語を使用する者は敵国のスパイの嫌疑をかけられ，日本軍によって殺害されたこともあったという。

2－3－4　「共通語」時代（昭和30年以降）

1951年以降，昭和47年の日本復帰まで，沖縄はまた本土とは別の道をたどることになる。アメリカ兵を通して，外来語（米語）の流入がはげしくなる。桑江『沖縄語の研究』の昭和29年の再刊版の前書きにあたる部分で，

純粋沖縄語は失われ，和洋琉の混成語の乱入，特に甚しいものがある。第一沖縄語が，既に死語となって郷里の青少年層に全く忘れられている

ものがある。……また，一方には，沖縄語自体が全く形を崩し，色々不純に変化せられた新造語も種々現れて来ている。……ダム(dam)（潅漑用貯水池)。バイバイ(bye-bye)（サヨナラ)。ハーニー(honey)（恋人)。ノーグッ（no good)（悪い)。ナイス（nice)。……などの外来語が盛んに割り込み，今日では青少年の殆どが通用語として之等を使用しつつある。

と述べている。

外間守善(1981)によると，昭和30年5月の『沖縄教育』に見られる「第一回全沖縄教育研究大会の研究集録」には，「共通語」と「標準語」の用語が併用されているという。そして，翌年の第2回大会では「共通語」という呼称に統一することが決定した。これは，全国的にみて沖縄が最初であり，ここにも明治期の「普通語」とならんで，沖縄の言語教育の特殊性が表われている。

日本復帰までの間も，学校では「方言札」が行われていたことが体験談として語られている。以下の引用は，儀間（1987）による（注3)。

高良　勉氏：戦後生まれの一九四九年ですが，生まれたところが島尻の玉城村で，田舎のほうです。高校時代まで，基本の生活はうちなーぐちだったように思います。最初にやまとぐち，いわゆる共通語に出会ったのは，僕の記憶では小学校に入る前，五歳ぐらいのときです。

　このとき初めて首里へ行って，親戚の家でやまとぐちを使っているのを聞いたんです。「首里の親戚へ行って僕はやまとぐちを聞いたぞ」と威張って田舎の同級生に言ったことが，いまでも記憶として残っているんです。……小学校三年生のころから非常に標準語励行が厳しくなって方言札が出回っていましたね。担任の先生に青竹がバラバラになるまで打たれましたよ，方言札を持ち過ぎるというので。

幸喜良秀氏：戦後最初の小学校一年生は僕たちから始まるんだけれど

も，戦後直後はわりと方言は自由でしたね。ところが四，五年生になって共通語励行ということが頻繁に言われるようになった。一九五〇年前後でしょうか。‥　僕たちの中学のころ先生方は復帰について新聞をよく読んで聞かせてくれたんだ。校長もよくやっていた。「復帰せんといかん。日本にどうせいくんだから，日本語を使えんといかん。」と絶えずそれを言われたよ。　‥明治からの共通語励行，方言撲滅運動が果たしたものと同じように，復帰運動では，言語については全然言わなかったが，学校では一緒だったと思うよ。

高良　勉：やっていますよ。方言札を徹底的にやられたもの。

2－3－5　復帰後の状況

昭和47（1972）年，日本復帰を果たした沖縄は琉球政府から沖縄県となり，官庁の公用語から英語が消え，日本語に統一されることになった。

3．北海道と沖縄の標準語意識

3－1　北海道の場合

小野（1980）「北海道における標準語意識」では，

われわれ地方人は，地方語の生活・方言の生活をしている。北海道とてその例外ではない。ところが北海道では，「方言」の生活をしているという意識がきわめて薄い。ふだん日常の生活のなかでは，自分たちのことばが方言であるか標準語であるかというような意識を，ほとんど持つこともない。むしろ，標準語を使うのが当然であり，毎日，標準語の生活をしているとさえ考えられている。そして，「標準語」といえば，他地方ではたぶん「東京」のことばをさすであろうが，北海道では「札幌」のことばと考えられている。

と述べて，北海道における標準語意識の特異性について指摘し，「全国諸方

言の混淆によって北海道なりの〝共通語〟が作りあげられてきただけに，「方言」と意識されることはなく，「標準語に近い」と考えられている。」と述べている。

1995年度の授業（注4）で，方言についての意識を学生にレポートさせたのであるが，その中にも次のようなものがあった。

○北海道の方言は，それほどきついわけでもなく，東京の言葉に近いすなわち共通語に近いと私はずっと信じていた。もちろん，「～しょ」「～だべ（さ）」など語尾につく方言や「しばれる」など共通語にはない言語の存在は認めていたが，さほど東京の言葉とかわらないのではないかと思っていた。もっと言ってしまえば，TVドラマの中で話している言葉と自分が話していることばは一緒だと信じて疑わなかった。

○（引用者注：川崎市から7年ぶりに札幌へきた学生が，函館出身のクラスメートが授業中に「自分に函館のなまりがあることの自覚はないが，まわりによく言葉がなまっていると言われる」という発言をしたときのことを）おもしろいと思ったのは，彼女のその解答ではなくて，教室で授業を受けていた他の学生の反応であった。彼女の発言の間，始終，くすくす笑う声が聞こえていたのである。それは彼女のことばが，その時教室にいたほとんどの学生の認識の中で，はっきりとなまっていたからであろう。だが，その笑う声，「なまってるよね」というようなささやきひとつひとつが，私にとっては，もっと笑い飛ばすべき対象であった。なぜなら，それはいうまでもなく，そのときの私にとって，函館の方言を話す彼女を初め，この大学のほとんどの学生たちは多かれ少なかれなまっていたからである。

このように，学生たちの標準語使用意識がうかがえる。北海道における共通語の成立事情は，全国各地からの入植者によってもたらされた諸方言が接触した結果，コミュニケーションの必要から次第に形成されたという点で，大きくその性格が異なっているのである。

文部省科学研究費補助金・総合研究(A)「北海道における共通語化および言語生活の実態」（代表者：江川清，1986－1988）では，札幌市と富良野市

という北海道でも内陸方言の地域で，社会言語学的調査が行われた。そのうち「共通語使用意識」については，相澤正夫（1990）が，分析し報告している。自分自身のふだんの言語使用に対して内省によって，「(1)いつも標準語で話す。(2)いつも方言で話す。(3)標準語と方言とが混ざる。(4)相手や場合によって，標準語や方言を使い分ける。」の4つの選択肢から選ぶというのであるが，「いつも標準語で話す」が，富良野では36 1%，札幌でも22 8%を占めるという結果が出た。また，「地元のことばは標準語と比べてどうか」という質問に対し，「全く同じ」「あまりかわらない」を合わせると，富良野が64 9%，札幌が52 4%という結果が得られた。小野の指摘が実証されたことになる。

3－2　沖縄の場合

大野眞男（1995）「中間方言としてのウチナーヤマトグチの位相」では，「ネイティブのヤマトグチ意識」をした結果を報告している。これは，①高年層（60歳以上），②活躍層（25～40歳），③高校生の三世代の3つの年代層に対して，方言矯正体験があるか，標準語教育は必要か，標準語に自信があるか，方言と標準語を使い分けることを肯定するかの4項目について，その意識を調査したもので，

> いずれも年齢層が若くなるほど百分率が右下がりに落ちていく。方言矯正を伴う標準語教育を戦前に受けた高年層は，標準語と方言を場面により使い分ける言語生活を是とし，そのための標準語教育が必要であると考え，自分でも標準語に自信がある，という意識を持っている。
>
> これに対して若年層は，矯正体験はさほどないが，かといって標準語(共通語)に自信があるわけでなく，使い分ける必要を感じず，そのための標準語教育も必要ないと考えていることになる。
>
> 高年層が若年層よりも，たとえ意識の上であれ標準語に自信を持っているのは，本土のどこよりも苛烈な標準語奨励運動を体験した沖縄独自の現象であろう。

と述べている。

北海道の場合と違い，自ら努力をし苦労して標準語を習得した体験をもつ高年層において標準語への強い自信が見られるのである。ここには，沖縄と北海道とにおける「標準語」なるものの性格・内容の違いが見られる。

また，若年層においては標準語に対して，「それほど自信があるわけでもなく，標準語教育の必要性も感じていない」という沖縄の状況と，自分たちは標準語を話しているから標準語教育も必要ないと考えている北海道の状況，そしてそのような状況における国語教育（言語教育）のあり方については，今後さらに検討してみたい課題である。

4．現代における方言への取り組み

4－1　テレビ・ラジオ・新聞における方言

沖縄に来て驚くことは，テレビ・ラジオに方言を使った番組が多いことである。

まぶい組『おきなわキーワードコラムブック　事典版』(沖縄出版　1989)の「沖縄の歌と踊りとお茶の間郷土劇場」の項目を見ると，

> 今はあまりメジャーな番組ではなくなったが，方言対訳の字幕スーパーつき沖縄オリジナル番組，特に芸能番組の双璧が，この二つである。前者のNHKの番組が，沖縄への転勤族の沖縄理解のテキストとして，後者のOTV（沖縄テレビ）の番組がおばぁたちの昼の楽しみとして位置していた。ビジネスマンとおばぁを結ぶ細い糸として重要な位置を占めていたが，ほぼ時期を同じくして，一方は番組改編で月一回に，もう一方は流行の二時間枠サスペンスドラマに押されて流浪の番組となった。

となっている。

今回の調査で沖縄を訪れた際に収集した新聞のテレビ欄を見ると，「お茶の間郷土劇場」（金曜日の午後2時5分から）は健在である。また，ラジオ欄にも，

1995.2 26(日)

ラジオ沖縄

午後　4：00　原けいこのうたやぬちぐすい

琉球放送

午後　5：00　芸能バラエティーふるさとバンザイ

6：00　黒沢秀男のんみゃーち・んみゃーち

1995 3 24㈮

ラジオ沖縄

朝5：00　安盛の暁デービル　吉田安盛　盛和子

昼0：30　民謡の花束　みい歌　方言ニュース

琉球放送

午後3：00　民謡で今日拝なびら　DJ北島角子　上原直彦

夜　8：30　上原直彦の語やびら島うた

などの番組が名を連ねている。このうち，ラジオ番組については，いくつかを筆者も聞いて見たが，漢語，外来語，そしていくつかの接続語が聞き取れる程度で，話の内容はほとんど理解できないものであった。今では，全国各地で方言を使用した番組は民放を中心にそれほど珍しくはなくなったが，言語の違いが大きいだけに一種のカルチャーショックを受けた。

また，新聞でも，例えば，

「命どぅ宝　堅持して」参院議員勇退の喜屋武真栄さん（琉球新報1995,2,26）という見出しや，

ワジワジーのセールス電話　真栄城恵子　42歳

……断わっても断わっても，いろんな会社から夜に電話がかかってくるようになって「ワジワジー」し，今度は主人が出るようにして，

…　（沖縄タイムス1995 3 26）

のような県外の者には理解できない表現が混じった投書が掲載されている。

また，「琉球新報」の副読紙である『週刊レキオ』には「おばあが笑ってV」というコーナーがある。その募集の文章を見ると，

おばあ求む　このページではユニークで明るく，元気なおばあをお待ちしています。

※あなたの大好きな，おばあの登場を待ちかんてぃーしています。（なお，おばあが方言のみ話す場合は通訳の方も必要となります。）

となっている。その一部を抜粋してみよう。

●照屋静子さん　プロフィール　童名・カマー　生まれ屋号・東内間

明治43年5月14日　南風原村兼城（現・南風原町）生まれ。85歳

あの，大阪では関東炊きというさぁね，んん，関東炊き。これ，煮ーてぇないうちにすぐ，酒ぐぁー飲みぶさぐとぅてぇ，また，はなはだしい人はね。ビンに注（ち）がらんしぇーやぁ，あの，コップぐぁーぬ酒。しゅぐヤカンぐぁー持（む）ちちゃーによ，入（い）りやーに，また，並びや入りやーに。こんなして，しゅる人もおったさ。

（1995年2月24日号）

●嘉数カメさん　童名・カミーぐぁ

実家の屋号・西九年母下（いりくねんぶすた）

現在の屋号・四男新内原小（よなんみーうちばるぐぁ）

大正4年6月10日　東風平村（現・町）宜次生まれ。81歳

……我んねーまた，いっぺー意地張りあたいくとぅよ。あはっ，あんさーに，戦後んなてぃムル商売やるばぁよ。戦後ムル商売せー。

……足伸ばそうね，足が痛いさ。太ってよぉ，太ってあれさぁ，太りすぎで足にきて。ロウマチあらんどぉ，太りすぎてよ。リハビリ行ってるから。なあ，膝がなぁ，かなーんなととぉるしかよ，ぐさんぐぁーちち農連なんか毎日（めーにち），日曜あらいね毎日出（ん）じょーるばあよ。

（1995年3月24号）

方言による語り口を活かしたユニークなコーナーである。

4－2　ウチナーブーム

沖縄は出版文化の盛んな所としても知られているが，そのうち最近出版されたもののうち，「沖縄ことば」に関するものをいくつか紹介する。『笑う！　うちなーぐちFAX小全』（ラジオ沖縄「前田すえこのいいことありそうウィークエンド」編・ボーダーインク）は，ラジオ番組のうちなーぐ

ちのコーナーを単行本化したもので，前書きには

沖縄には，なかなか味のある表現をするうちなーぐちがたくさんあります。どうしてもニュアンスをやまとぐちに直せない言葉。そんな言葉を求めて，毎週土曜日の朝，あびやーあびやーしているラジオプログラムを御存知ですか。沖縄の香り豊かな放送局ラジオ沖縄で土曜日の朝七時から十二時まで放送している人気番組『前田すえこのいいことありそうウィークエンド』の名物コーナー「沖縄探検隊」がそれです。

とあり，1991年から1993年までのオンエア作品が掲載されている。また，この本の奥付には，旧暦も添えられているなど，凝ったところを見せている。

次に，まぶい組新城和博氏（1963年生まれ）の『うちあたいの日々　オキナワシマーコラム集』(1993年11月・ボーダーインク）は，

【ひざまずき】

沖縄に「うちなー大和言葉」数多かれど，県民の九八％の人に標準語だと信じられている，究極の「うちなー大和言葉」は，「ひざまずき」です。

沖縄で「ひざまずき」といえば，いわゆる「正座」のことなのです。「直子，しばらくひざまずきしていなさい！」とか「私，一時間ひざまずきしても，平気ってば」とか「はーい，みなさん，お行儀良くして，待っていましょうね。ひざまずきしてね」すべてこれは正座のことなのです。響きが，完全に大和言葉風ということもあって，この言葉が「うちなー大和言葉」であることは，他の地方の人に指摘されない限り，ウチナーンチュはわからない。つまり「神の前にひざまずきなさい」とか言われると，沖縄の人の大部分は，神の前で正座してしまうのである。

のようなコラムを集めたものである。昭和5年の桑江『沖縄語の研究』にも取り上げられるべき，いわゆる「気付かれにくい方言」による，ありそうな話ではある。なお，「まぶい」というのは，ウチナーグチ（沖縄の方言のこと）で，「魂」とか「気力」というか「精神」というか，そういう意味合いを表すことばだそうである。

1967年生まれの大城ゆか氏によるコミックものに『山原バンバン』

（1994・ボーダーインク）がある。これはセリフに沖縄口が使われ，欄外に大和口による訳がついている体裁の漫画である。セリフの部分だけを少し引用する。

○つよしと一緒（まじゅん）何がら歌いんり　あびとーたーしが

＊つよしと一緒に何か歌うっていっていたが

○えー　起（う）きれー　やー　一旦　家（やー）に帰（けえ）いさになーちこくど

＊おい起きろよ　お前一旦家に帰るだろ　遅刻するぜ

また，最後の「解説」にあたる部分にも，方言混じりの文章があり，注がつけられている。

ウシの感想文　知念ウシ

ついに，である。ついに大城ゆかさんの単行本の発刊が実現しました。この日が来るのをドキドキ，ワクワク，肝（ちむ）ワサワサー(1)しながらまちかんてぃー(2)していましたが，過ぎてしまえばたでーま(3)ですね。それに，なんとまあ，ゆかさんの本の後ろのほうにわたしの文章がたっくぁー(4)されることになったそうで，はっさもう，でーじなっている(5)，全くもって光栄の至りです。

(1)ドキドキワクワク　(2)待ちわびる　(3)あっという間

(4)くっつける　(5)あらあら，大変なことになってしまったわ

漫画には，『日刊宮古』というローカル新聞に連載された，方言を多用した4コマ漫画を『Mr ガラサ』（うるか友（本名　砂川友弘））として単行本化したものもある。作者は1952年生まれで，「ガラサ」とは宮古方言でカラスのことである。

一般向けの沖縄方言テキストも，観光客向けの会話集程度のものをはじめ，専門家の監修によるもので，独特の方言音を表記するための文字を使うなど工夫を凝らしたものがある。中松竹雄監修・船津好明著『伝統文化の真髄　美しい沖縄の方言（ことば）』（1988・技興社）がそれである。「まえがき」の一部を引用する。

近年，沖縄語を話せる人は少なくなっています。特に若年層で目立っ

ています。このような事情から，この本は沖縄語の普及をねらいとしたものですが，当然のことながら，共通語の中に沖縄語を体言的に織り混ぜようというものではなく，助詞と用言の活用において沖縄語の特徴を最大限に発揮させようというものです。したがって，沖縄語の中に共通語などの単語を体言的に織り混ぜることは，消極的であればむしろ許すという考え方です。現在，日用沖縄語の普及書は少ないのですが，この本によって活きた沖縄語が，最も特色ある沖縄の伝統文化という理解のもとに，新たな関心が寄せられ，親しみをもって人々の間に広まっていくことを願うものです。

沖縄語を文字で書き表すには,既存の文字でもある程度はできますが,この本では沖縄語の音の特徴をできるだけ活かすために,沖縄文字23個と旧文字2個を採用することにしました。沖縄文字は技興社の豊住明広氏と日本タイプライター株式会社の大久保和夫氏の沖縄文化に対する先見の明によって,初めて実用活字として世に出ることとなったものです。

新聞社主催のカルチャーセンターである「新報カルチャーセンター」では，沖縄学コースとして,「健康と沖縄の薬草」「琉球舞踊」「琉歌のつどい」「古武道入門」とならんで,「沖縄の方言」講座が開設されている。今回の調査旅行では日程の関係で残念ながら，見学できなかったが，事務局員によると，地元の若い人の他に，他県からの大学生や転勤族もいるという。大野(1995)によると,「沖縄の人と話をするときに，ウチナーヤマトグチを自分でも使うか？」というアンケートに対して,「よく使う」「まれに使う」合わせると26%ものノン・ネイティブが使用すると回答していることに注目すべきとして,

沖縄ネイティブが本土出身者に対してヤマトグチで接しようとするのと全く同様に，本土出身者も沖縄ネイティブに対しては彼らの言葉に近いウチナーヤマトグチを用いようとしていることを示している。アコモディーションが，ノン・ネイティブから沖縄ネイティブという方向で，作用しているわけである。おそらく関東出身者が関西弁を真似して同化したがるのとよく似た現象であり，沖縄の持つ風土的誘引によるものだ

ろう。

と分析している。

また，書店の沖縄出版コーナーには，沖縄テレビ制作の「沖縄芝居」のビデオが多数発売されている。沖縄芝居に関しては，

1．劇団与座ブラジル壮行特別公演

……公演はブラジル沖縄県人会が社会福祉事業の一環として企画，沖縄側に劇団派遣を要請してきたもの。「ブラジルの一世の皆さんに沖縄芝居を見せてあげたい。… ・」（琉球新報 1994,11,8）

2．【名護】一九日市内の中学校で一斉に卒業式が行われたが，東江中学（長山寛雄校長）では教職員が方言劇「白い煙り，黒い煙り」を上演，卒業生の門出を祝った。……昨年は生徒も参加して「丘の一本松」を上演。

3．「方言忘れないで」

【嘉手納】嘉手納町老人クラブ連合会（渡久山朝慎会長）

結成三十年記念事業の一環の「ゆんたく，耳ぐすい講演会」が二十二日午後，同町総合福祉センターで開催された。講師は沖縄芝居の真喜志康忠さんは「うちなー芝居よもやま話」と題して講演。「言葉は文化。親から伝わった方言を忘れてはいけない」という真喜志さんは方言中心で話し出し，小話を織り混ぜながら会場を沸かした。明治時代に始まった沖縄の商業演劇が時代にほんろうされながらも今日まで続いていることを挙げ「一県の方言でここまで商業演劇が続いたのは沖縄だけだ」と強調した。（琉球新報　1995 3.24 朝刊）

といった記事が目についた。この他，町中で多く見かける「三線教室」の看板や，小学校の三線クラブの活動，そして最近の「島唄」ブーム，沖縄ポップスブームなど，沖縄文化・芸能に見られる隆盛は目を見張るものがある（注5）。

このような若い人を中心とする方言への関心は，全国的にみられるもので，『みんなの方言講座①北海道弁・東北弁・大阪弁・広島弁』（全国方言友の会編，1994），『試験に出る関西弁集中講座』大坂世一，1993）や，ラッ

プの「だよねー」のフレーズでヒットしたイースト・エンド・プラス・ユリの「ダ・ヨ・ネ」の大阪バージョン「ソ・ヤ・ナ」，名古屋「ダ・ガ・ネ」，広島「ホ・ジャ・ネ」，仙台「ダッ・チャ・ネ」，福岡「ソー・タ・イ」，北海道「ダ・ベ・サ」などのバージョンが1995年に発売されている。

他に，地方色を出すために，方言を使ったCMや商品名なども目にすることが多くなった。標準語のモデルとされたNHKでも，大阪弁によるラジオ番組が企画されたり，民放のテレビ番組でも全国各地をネットする朝の番組などでは，その利点を活かして方言に絡んだ企画がよく行われている。地元ローカルの番組でも方言に関連した企画は人気が高いという（注6）。ひところの「一村一品運動」にみられる地方への関心の高まり，「村起こし運動」とも関連していると考えられる。

4－3　アイヌ語復興運動

沖縄におけるバイリンガル（ウチナーグチとヤマトゥグチ）と対比されるべきものは，アイヌ人のアイヌ語と日本語のバイリンガルということになろうが，現在，アイヌ人でこの意味のバイリンガルといえる人の数はごく限られており，その人たちにしても日常は日本語のみのモノリンガル生活である。平成元年から平成4年にかけて，重点領域研究「日本語音声」で，10人ほどのバイリンガルの方の日本語音声を収録することができた。この人たちの日本語にはアイヌ語の影響とみられる音声特徴がみられたが，当時80歳代後半以上の方々であった。その中のお一人であったアイヌ語静内方言の話者である織田ステノさん(1989年当時，94歳，本人談)は，母語がアイヌ語で，ご本人の話では30歳を過ぎて，娘さんが小学校に行くようになって教育上，家庭でも日本語を使わなければならなくなり，日本語を覚えるようになったとのことである。幼い頃，子守りとして，「仙台衆」の家に行き，そこで日本語を覚えたが，おばあさんにシャモ（和人）の言葉を絶対真似するなと頭がこぶだらけになるくらい叩かれたという話をしてくれた。（菅（1991）による。）

明治33（1900）年士別生まれで旭川在住の荒井源次郎さんも，母語はア

イヌ語で，日本語は小学校に入学してから習得したが，日本語を使うのは学校の中だけで，家庭や友人と遊ぶ時はアイヌ語であったとのことである。

やはり　小学校の　四年か五年になるとね　両方使いますけどもね，私が　その　小学校入りまして　その　家庭においては　アイヌ語を使い　学校においては　日本語を勉強するでしょ　で　帰ってきてからその　日本語を使うと　笑われたもんですよ。アイヌのね　何を言わんと(するか)，しゃべろうとするか　親が分からんから　何を　話をしてるのか　分からんでしょ。(菅（1992）による。表記は改めた。)

旭川のアイヌコタンは道内でも最も早く伝統的アイヌの生活風習がくずれた所といわれているが，大正15年旭川生まれの杉村京子さんは，「母キナラブックのこと」(『北海道女性史研究・第7号』，1974）によると，母親キナラブックさんは「アイヌとしての苦労をさせたくないと思って，アイヌ語を一切使わせなかった」ということである。キナラブックさん自身のテープも残っており，それによると，

アイヌ語って　使われんかった　ひとっちゅ（＝一つ）も　がっこ（＝学校）行って　（日本語を）習っているべさ。ほいで（＝それで）　うちへ帰ったら　アイヌ語ってゆったら　子供ら　迷ってしまう。こりゃいけないと思ったから　しとくちてさえ（＝一口でさえ）　（アイヌ語を）教えたことないんだよ。

と語っている。アイヌ語を使っていては生活できない状況があったことを物語っている。このような事情で，杉村京子さんがアイヌ語を勉強しはじめたのは，中年になってからのことであった。その事情を

アイヌが嫌で，アイヌってゆわれたくない，アイヌ，アイヌ　そればっかり考えていたから。で，今アイヌ問題でね，盛んに騒いできたしょ。で，アイヌとゆわれることもね，気にしなくなったし，大きな顔でアイヌですよってゆうアイヌがでてきたでしょ。

私の母だけじゃなくて，どこの親も……みんながアイヌ語を使わないで子供たちをシャモ語で育てたわけ。だから，ちょっとした水だとか火だとかさ，箸だとかって，そういう簡単なものはみんな覚えているけど，

それ以外の難しい言葉は一切親たちゆわないし。親たち同士はしゃべるんだよ。何ゆってるか分かんない。もう，ばあちゃんら集まったら何ゆってるんだかさっぱり分かんないけども，聞けば分かるけど，喋ることはできなかった。(菅（1993）による。表記は改めた。)

と語っている。明治政府の同化政策により，アイヌ人からアイヌ語を奪ったため，現在，アイヌ語を母語として使える人はほとんどいなくなってしまったのであるが，アイヌ語熱が最近高まりを見せている。1987年以来，道・国からの助成を受けて，道内各地12カ所ほど，北海道ウタリ協会による「アイヌ語教室」が開設されており，受講生は年間のべ300人ぐらいの規模で(注7)，アイヌ人だけでなく，アイヌ語やアイヌ文化に関心を持っている和人も一緒に学習を続けている。その成果は，毎年開催されている「アイヌ民族文化祭」などで，アイヌ語劇やアイヌ語による弁論大会の形で発表されている。

また，そのアイヌ語教室で使用するための教科書として，アイヌ語研究者の協力による『アコロ　イタク』(社団法人　北海道ウタリ協会，1994)も出版された。

5．まとめ――これからの研究に向けて――

アイヌ語のたどってきた道と，沖縄での標準語励行運動に共通するのは，日本の「近代化」という歴史である。その中で，近代化に果たした教育，特に国語教育におけることばの教育の取り組みについては今後もさらに詳しく調べてみたい課題である（注8)。

北海道のように方言を使っているという意識がなければ，方言教育は特に必要ないということになりかねない。自分たちがどんなことばを使っているのかを客観的にとらえる教育が必要である。共通語を目指しての国語教育の時代は終り，身近な生活語から言葉を見直す教育，方言の持っている表現力の豊かさを，共通語の中に積極的に取り込むことによって，日本語をさらに豊かなものにするための教育が，行われることが望まれる。そ

の際には，異種のものを排除するのではなく尊重し，その価値を認める態度，バラエティを正当に受け入れる姿勢を養うことが要請される。このような言語教育（国語教育における方言と共通語の問題）をはじめ，言語生活のありかたなど，さらに考察を加えるべき課題は多く残されている。

《注》

注１：平成１年度・文部省科学研究費補助金重点領域研究『日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究』(研究代表者・杉藤美代子)

注２：昭和29年発行の『改訂標準語対照沖縄語の研究』再刊版による。

注３：初出は「うちなーぐちから豊かな言語生活を」(『国語通信』筑摩書房・昭和60年８月)

注４：1995年度北海学園大学人文学部「日本語学Ⅰ」，藤女子短期大学国文科１年「国語学講義Ｂ」において，日本の社会言語学のテーマで行った授業である。

注５：照屋林賢の「りんけんバンド」は，東南アジアでも高い人気を誇っている。伝統文化をそのまま受け継ぐのではなく，現代風にアレンジして発展させている点が評価されている。新城（1993）の『大須賀猛・ASIAN BEATS CLUB 編『エイジアン・ポップ・ミュージック』に対する書評の中で，

「沖縄」が果してどのポジションにいるのか，という視点は，今非常に重要なことだ。いったい「南」なのか「北」なのか。だが，こと音楽に関していえばスパッと言えるかもしれない。「東南アジアの最北端」。

ここ数年の「沖縄音楽ブーム」の中，大和から注目された沖縄人は「ヌーガイフーナーヤッサー」などと不思議がりつつ，まんざらでもない顔をしていたのだが，彼等の耳からすれば，「沖縄の音楽」というものは，あきらかに「アジア」そのものとして響いて

いたのだ。それに一番鈍いのが沖縄人本人だろう。

と，述べている。

注6：札幌テレビ放送（STV）横堀博氏の談による。

注7：1994年第109回日本言語学会公開講演会，中川裕・大谷洋一「アイヌ語研究の現状と問題点」（沖縄県・名護市）

注8：桑原真人（1975）「『北海道用尋常小学読本』について ――『沖縄県用尋常小学読本』との対比において ――」（『開拓記念館調査報告』第9号，北海道開拓記念館）は，明治30年から数年間，日本の両端にある沖縄と北海道で特別な教科書が使われたことを取り上げている。

《文献》

相澤正夫（1990）「北海道における共通語使用意識 ―― 富良野・札幌言語調査」，国立国語研究所『研究報告集』11

大野眞男（1995）「中間方言としてのウチナーヤマトグチの位相」，『言語』1995, 11別冊　大修館書店

小野米一（1993）「北海道における標準語意識」，『北海道方言の研究』　学芸図書株式会社

儀間　進（1987）『うちなぁぐちフィーリング』　沖縄タイムス社

桑江良行（1930）『標準語対照　沖縄語の研究』

（1954）『改訂標準語対照　沖縄語の研究』

柴田　武（1978）『社会言語学の課題』　三省堂

新城和博（1993）『うちあたいの日々　オキナワシマーコラム集』　ボーダーインク

菅　泰雄（1991）「アイヌ語静内方言話者の日本語音声と語彙」，『国語国文研究』第90号

（1992）「荒井源次郎さん談話資料」，村崎恭子編『アイヌ語話者の日本語音声(1)』　科研費報告書

（1993）「杉村京子さんの談話資料」，小野米一『アイヌ語話者の

日本語北海道方言についての研究』科研費報告書　所収
中松竹雄（1994）「沖縄県における共通語化の過程」，『ことばの世界』北海道方言研究会叢書第5巻
中本正智（1990）「国語教育と方言教育」，『日本列島言語史の研究』　大修館書店
永田高志・他（1985）「沖縄県大里における共通語化」，『SOPHIA　LINGUISTICA』18
永田高志（1991）「沖縄に生まれた共通語(文法論)」，『琉球の方言』15　法政大学沖縄文化研究所
（1993）「沖縄に生まれた共通語（音韻・アクセント篇）」，『琉球の方言』17　法政大学沖縄文化研究所
比嘉正範（1983）『言語』1983,1
外間守善（1971）『沖縄の言語史』　法政大学出版局
（1977）『岩波講座　日本語11　方言』　岩波書店
（1981）「沖縄における言語教育の歴史」，『日本語の世界9　沖縄の言葉』　中央公論社
町　博光（1992）「沖縄方言の現在」，『日本語学』1992,8　明治書院
本永守靖（1984）「南島方言と国語教育」，『講座　方言学10　沖縄・奄美の方言』　国書刊行会
屋比久浩（1987）「ウチナーヤマトゥグチとヤマトゥウチナーグチ」，『国文学解釈と鑑賞』　昭和62.7　至文堂

※　本稿は，平成6年度北海学園大学研究助成費・共同研究「近代日本における文化・文明のイメージ」（研究代表者：永井秀夫）の成果の一部である。